

日・英における気象表現と感情表現との対応関係のメカニズム

— 認知言語学的アプローチ —

李 潤 玉

Summary

This paper is intended to reveal the mechanism in terms of cognitive linguistics in which why so many expressions of various weather states are mapped on those of human emotions in Japanese and English. This mechanism works very well for Korean and it will appear in the next Volume.

はじめに

我々は自身の生身の肉体を用いて外界と関り、文化・社会的な知識の枠組みに基づいて日々の生活を営んでいることは言を待たない。それ故、人間が外界と関る上で最も重要な手段の一つである言語は、日々の身体経験やモノの捉え方が深く刻み込まれた心象表示記号であると考えられる。しかしながら、そうした大脳活動と言語記号とを結びつける外界認識のプロセスの全容については未だに解明されていないままである。このような現状を打破する一つの鍵となるのが、比喩のフィルターを通した認識に基づく「意味変化」である。古来より人間はあらゆるモノに名前をつけ、指示対象物に関する様々な情報交換を行うことを可能にしてきた。文明の発達により新しい物が溢れる環境に属すればするほどそれらにつける名前は増えていくことになるが、人間は何も全てのモノに相異なる新しい単語を創り出すような不経済な活動を行う動物ではない。賢明な人間（の大脳）は、既存の単語を利用して効率よく名前をつける活動により、有限の道具立てで無限の意味表示を行ってきたのである。こうした「言語の経済性に基づいた意味変化」の見地に立脚すれば、たとえば下記（1）

(1) crane [名] [C]

1 (土木作業機械の) クレーン, 起重機.

2 《鳥》ツル, サギ.

— WEJD (s.v. crane)

に見られるように、一見何らつながりが感じられないような複数の意をただ単に列挙するしか捉えようがなかった多義性についても、そのメカニズムを単一の概念的観点から説明することが可能となる。結果から言えば、この意味変化のプロセスを明らかにするためには、以下 (2) の捉え方が肝要となる：

(2) a. 心理物理的法則 (しんりぶつりてきほうそく)

psychophysical law

心的な事象と物的な事象の間の規則的關係を主張する法則。厳密に決定的な心理物理的法則があれば、心的な事象を物理法則に基づいて説明・予測することが可能になる。

—『認知科学辞典』(s.v. 心理物理的法則 しんりぶつりてきほうそく)

b. 投影法 (とうえいほう)

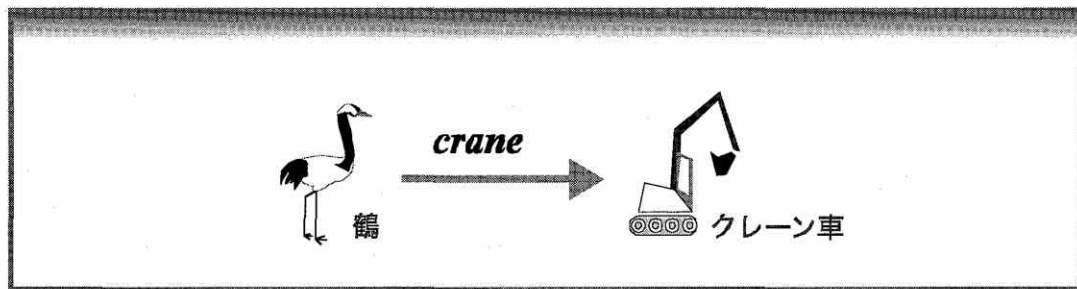
projection method

投影法は、課題の多義性、曖昧さを特徴とする人格検査であり、曖昧な一定の刺激を与えて被験者のある程度自由に任された多様な応答を心の内面の投影と考え、性格傾向や心理状態、精神力動を推測し解釈する。代表的な投影法テストであるロールシャッハテストは、インクのしみでできた左右対称の漠然図形カード10枚を一定の順序で決められた向きから見せ、何に見えるかが問われる。得られた被験者の反応パターンは採点表に分類、整理され、知的側面、情緒的側面、自我機能の側面などから人格構造が力動的に解釈される。

—『認知科学辞典』(s.v. 投影法 とうえいほう)

つまり、crane は本来「ツル」の意を原義とするにも関らず、工事現場などでよく見かける「クレーン車」の「クレーン」も同じ単語でもって示される背景には、「姿・形」の酷似・「動作の酷似」という意味変化のトリガー (trigger) が存在しているからである。それ故、「ツル」から「クレーン」への意味変化の「投影 (projection)」プロセスは次の (3) として描かれることになる：

(3) 「ツル」から「クレーン」への意味変化の「投影 (projection)」プロセス

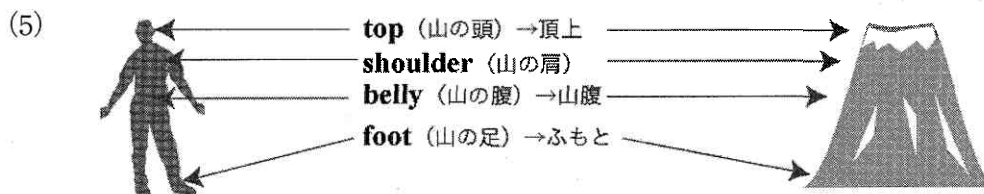


— 上野・森山・福森・李 (2006: 25)

既知の姿・形を別の物に写す、このような「投影」活動は何も英語だけに限る現象ではない。たとえば、次の (4)-(5) では、日本語・英語ともに「山」は人の姿・形に見立てられていることが観察される：

(4) あたまを雲の上に出し 四方の山を見おろして

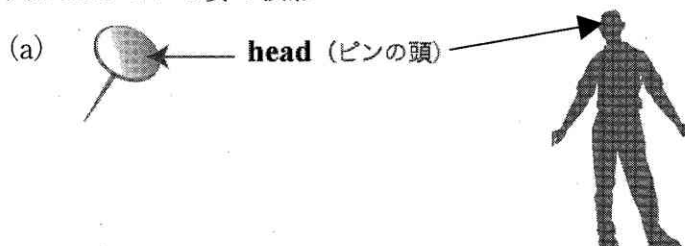
かみなりさまを下に聞く ふじは日本一の山 (童謡『ふじの山』)



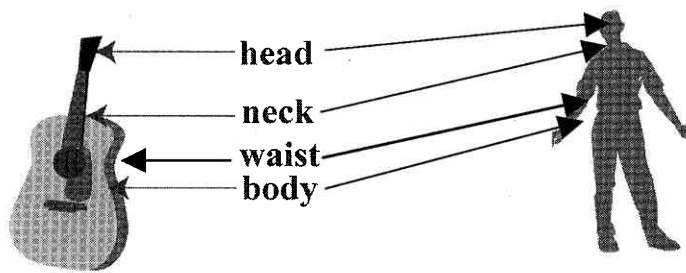
— 上野・森山・福森・李 (2006: 199)

このように、異言語間に渡って同様の概念化が観察されるのは、偏に我々の「身体性」に収束する。つまり、「投影」とは、或る対象物を表すために自分が大脳に貯えているモノの姿・形を利用する言語活動であるが、我々人間にとってその最も身近な物が自身の「身体」に他ならない。このような理由から、言語形態の如何に拘らず、次の (6)-(9) でも異言語間にまたがる「モノの捉え方」が確認されることになる：

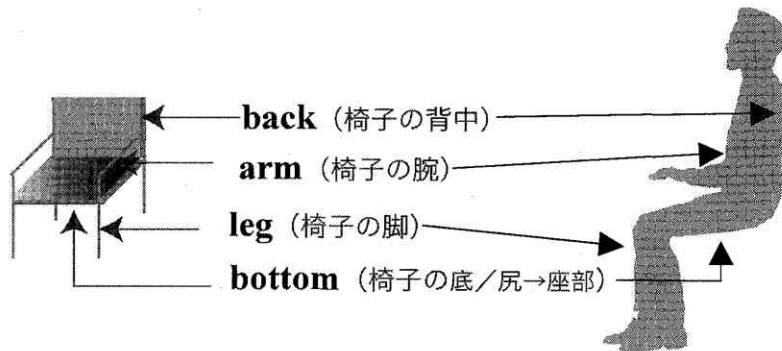
(6) 人が立っている姿の投影



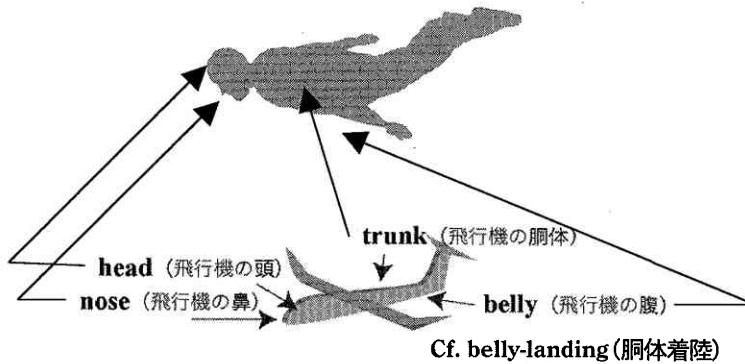
(b)



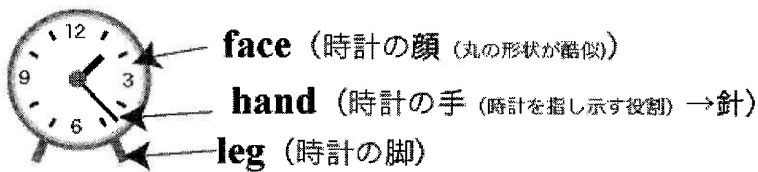
(7) 人が座っている姿の投影



(8) 人のうつ伏せの姿の投影



(9) 形状、役割に基づいた投影



— 上野・森山・福森・李 (2006: 200-201)

ちなみに、次の (10) のイギリスの口語表現に至っては、

(10) one-armed bandit (スロットマシン)

(≡ [米] slot machine, [英・正式表現] fruit machine)

(※ fruit machine は果物の絵あわせによる賭博機であることに由来)

人からお金を全部奪い取ってしまう盗賊 (bandit) に賭博機が見立てられていると同時に、ガチャンと手前に引き下げるハンドルが片腕 (one-arm) として見なされている投影活動が見出される。このような「類似形状の連想」に基づく認識を表す図が以下 (11) である：

(11)



— 上野・森山・福森・李 (2006: 201)

このような導入を経て、今回は「天候と心象との概念的関係」にトピックを絞り、「投影」認識を活用することで、日本語・英語の異言語にまたがって存在する多義性のメカニズムとその並行した意味変化のプロセスの一端を明らかにする。

1. 0. 身体性に基づく投影活動のメカニズム

以下 (1) に示されるように、認知言語学の枠組みでは擬人化は死喩 (dead metaphor) として扱われ、特異で体系的でなく孤立した (idiosyncratic, unsystematic, and isolated) 言語表現しか生まないと見なされてきた：

- (1) In addition to these cases, which are parts of whole metaphorical systems, there are idiosyncratic metaphorical expressions that stand alone and are not used systematically in our language or thought. These are well-known expressions like the *foot* of the mountain, a *head* of cabbage, the *leg* of a table, etc. These expressions are isolated instances of metaphorical concepts, where there is only one instance of a used part (or maybe two or three). Thus the *foot* of the mountain is the only used part of the

metaphor A MOUNTAIN IS A PERSON.

(メタファーの全体系の一部であるこうした場合に加えて我々の言語活動や思考において体系的には使われず、孤立して存在しているメタファーを通じた特異な表現がある。それらは、the *foot* of the mountain (山の足 (= ふもと))、a *head* of cabbage (一頭 (= 一個) のキャベツ)、the *leg* of a table (テーブルの脚) などといった表現としてよく知られている。こうした表現はメタファーを通じた概念の中でも他から孤立した例であって、その使われている部分はその例にしか (あるいは、せいぜい2, 3の例にしか) 現れないのである。したがって、the *foot* of the mountain (山の足 (= ふもと)) は A MOUNTAIN IS A PERSON (山は人である) という唯一の使われた部分の例なのである。)

— Lakoff and Johnson (1980: 54) (日本語訳筆者)

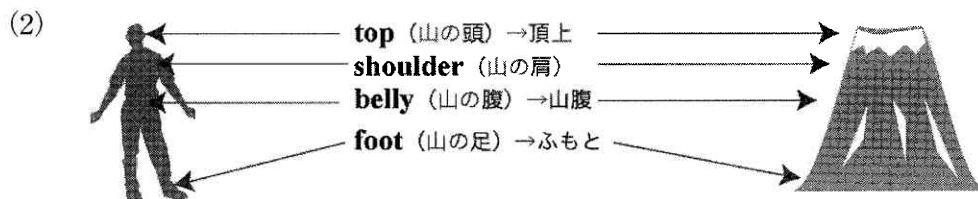
しかしながら、本論の冒頭で観察したように、投影活動に基づく擬人化表現は非常に固定化されている反面、我々の日常会話に溢れており、外界事象／事物と我々の生身の肉体とが如何に密接に結びついているかという概念的関係を明らかにする上で見逃すことはできない。そこで、以下では、我々の日常生活において最たる自然物の一つである「山」および「太陽」に言及する種々の表現を取り上げ、身体性に基づく投影活動のメカニズムの一端を観察する。

1.1. 「山」の擬人化表現の分析

冒頭「はじめに」の (4)-(5) (以下、それぞれ (1)-(2) として再掲) で観察したように、日本語・英語ともに「山」は人の姿・形に見立てられ、身体の「形状」がそこに投影されていることが見出される：

- (1) あたまを雲の上に出し 四方の山を見おろして

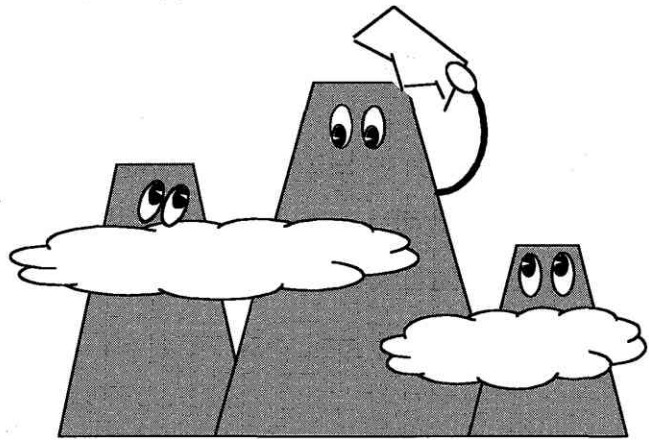
かみなりさまを下に聞く ふじは日本一の山 (童謡『ふじの山』より)



このような表現は日常、比喩化されたものであるという意識が無いまま用いられるがあまり、人

間が如何に自身の生身の肉体を有効に活用して外界事象を捉えているのかという大脳内活動との深い関わりが軽視されがちである。しかしながら、次の (3)

- (3) 柱に凭 (もた) れりゃ すぐ見える
遠いお山も 背比べ
雲の上まで 顔出して
てんでに背伸 (せのび) していても
雪の帽子 (ぼうし) を ぬいでさえ
一はやっぱり 富士の山



— 童謡「背 (せい) くらべ」(図は筆者)

に見られるように、投影活動による意味変化は多様であり、Lakoff and Johnson が言う「体系的でなく孤立して存在している特異なメタファー表現 (idiosyncratic metaphorical expressions that stand alone and are not used systematically)」どころか、新奇な表現を生み出す非常に生産的な側面が確認されるのである。事実、下記 (4)

- (4) sierra Nevada¹
(ネバダ山脈)

におけるスペイン語 'Nevada' (<L.neve- 'snow') を英語母語話者²が直訳すると、次の (5)

- (5) snow-clad
(雪の衣をまとった)

として解釈されるのも、同じ「人間」という生物が外界の事物を眺めているからであり、ここに身体性に基づく投影活動が「人間文化としての現れ」であることが確認されるのである。

1.2. 「太陽」の擬人化表現の分析

以下 (1a-b) に見られるように、太陽が往々にして「人間の顔」に喩えられる現象は少なくない：

(1) a. お日様がにっこり微笑んでいる。

b. お天道様 (てんとうさま) が見ている下では、悪事を働けない。

— 上野・森山・福森・李 (2006: 53)

太陽が人間の「顔」に見立てられる共通項は偏に、「円」で捉えられる「形状」であると考えられる。太陽から人間の「顔」が非常に連想しやすいのは我々の実体験からも明らかであり、たとえば小さな子供に太陽の絵を描かせた時、その中に目や口などの顔の部位を書き込むことがあるのもその顕著な現れである (Cf. The sun is *smiling* now.)。このような理由から、次の (2)

(2) The sun *rises in the east* and *sets in the west*.

(太陽は東から昇って、西に沈む)

— 上野・森山・福森・李 (2006: 54)

における ‘The sun rises in the east’ が「東の三次元空間内 (in)」で太陽が地平線から昇っていく運動を人間が身を起こす／立ち上がる運動に見立てたメタファー化の表現であるのに対し、‘The sun sets in the west’ は「西の三次元空間内 (in)」で太陽が地平線に没していく運動を (立ち上がったと見立てられた) 太陽が座る行為に見立てられたメタファー化の表現であると見なすことができる。事実、下記 (3)-(4)

(3) 1 《OE》 起きる；立ち上がる

— 寺澤 (編) (1999) (s.v. rise v.)

(4) Taro *rose* from the $\left\{ \begin{array}{l} \text{bed} \\ \text{floor} \end{array} \right\}$.

(太郎はベッド／床から身を起こした)

— 上野・森山・福森・李 (2006: 47)

に見られるように、rise の本義は「身を起こす (= 水平面からの上方への動き)」である一方、次の (5)-(6) に示されるように、

(5) ◆ OE (*ge*) *settan* < Gmc **satjan* to cause to sit (Du. *zetten* / G *setzen* / ON *setja* / Goth.

satjan) (caus.) ← **setajan* ‘to sit’

— 寺澤 (編) (1999) (s.v. *set*) (下線筆者)

(6) a. They *set* the new machine on the floor.

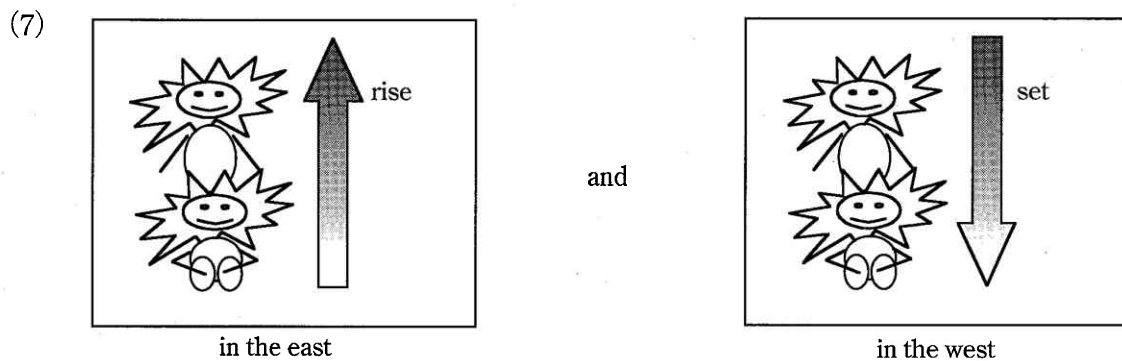
(彼らは新しい機械を床に据えつけた)

b. The statue was *set* firm on the base.

(その像はしっかりと台座に据えられた)

— 上野 (2007: 11-14)

「或る位置や場所にしっかりと／きちんと置く」という概念をその根源とする他動詞 *set* は「座る」の意を表す自動詞 *sit* と同源であることから支持される³。以上の論旨から導き出される結論を下図 (7) としてまとめる：



このような理由から、次の (8) の童謡においても、身体性に基づく投影活動が外界事物の認識に有効である言語実例が確認されることになるのである：

(8) 昔々の その昔

椎 (しい) の木林 (ばやし) の すぐそばに

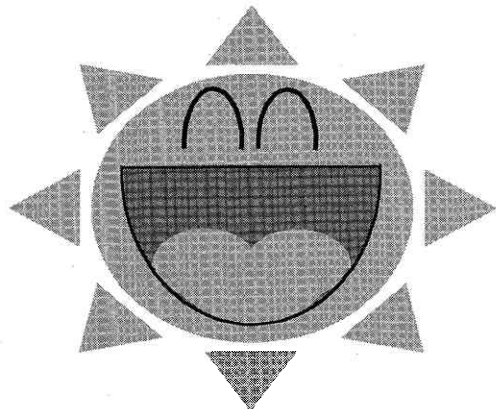
小さなお山が あったとさ あったとさ

丸々坊主の 禿山 (はげやま) は

いつでもみんなの 笑いもの

「これこれ杉の子 起きなさい」

お日さま にこにこ 声かけた 声かけた



— 童謡「お山の杉の子」(図は筆者)

2.0. メタファーと投影活動

ここでは、種々の人間活動の中でも「発言行為」と「視界認識」に焦点を絞り、自然界の事象が如何に我々の日常活動と関っているのかという認知メカニズムをメタファー理論も交えながら観察する。

2.1. 「発言行為」と自然界の事象との概念的結びつき

言葉の伝達メカニズムには以下のような複合メタファーによって成り立つ「導管メタファー (The CONDUIT Metaphor)」が機能していると言われている：

- (1) IDEAS (or MEANINGS) ARE OBJECTS.

(考え (もしくは意味) は物体である)

- (2) LINGUISTIC EXPRESSIONS ARE CONTAINERS.

(言語表現は容器である)

- (3) COMMUNICATION IS SENDING.

(伝達は送ることである)

— Lakoff and Johnson (1980 : 10) (日本語訳筆者)

その実例が次の (4)-(5) である：

- (4) It's difficult to *put* my idea *into* words.

(自分の考えを言葉の中に入れることは難しい；自分の考えを言葉で表現することは難しい)

- (5) His words *carry* little meaning.

(彼の言葉はほとんど意味を運んでいない；彼の言葉はほとんど意味がない)

— Lakoff and Johnson (1980 : 10-11) (日本語訳筆者)

具体的に言えば、言葉の伝達とは、まず、話し手が言語表現という「容器」に自身の考えや意見を詰め込み、聞き手に「送る」ことが必要となる。そして、聞き手がその受け取った容器から、「内容物」である話し手の考えや意見を取り出すことであると考えられる。このような理由から、それぞれ「筋が通る；理屈に合う」／「一言で言えば；つまり」としか和訳されることしかな

かった連語表現（いわゆる「熟語」と呼ばれる表現）である hold water / in a (時に one) word も下記 (6)- (7) のような概念で捉えられることが可能となる：

(6) hold water 筋が通る；理屈に合う [※通例否定形で用いられる]

<捉え方>：

字義通りに訳すると「(内容物である) 水を保つ→(容器が) 水を漏らさない」。つまり、hold water にも上記の「導管メタファー」が機能しており、「考えや意見が詰め込まれている言葉 (= 容器) がしっかりしている」イメージ：

例：Jessie's argument does not *hold water*.

(ジェシーの論議はしっかりしていない→筋が通らない)

(7) in a word 一言で言えば；つまり

<捉え方>

以上の「導管メタファー」の捉え方に基づけば、in a word/in one word は「一言 (= 容器) の中に (in a word/in one word) 考えや意見 (= 内容物) を詰め込む」イメージ：

例：She is, *in a word /in one word*, a utopian.

(彼女は一言で言えば夢想家である)

— 上野・森山・福森・李 (2006: 358)

そして、上出 (1)-(3) の導管メタファーにおける COMMUNICATION IS SENDING (伝達は送ることである) という下位メタファーに天候事象に基づく投影活動が加味された事例が次の (8) である：

(8) 雨あられのような罵詈雑言 (ばりぞうごん)

つまり、ここでは同じ「伝達は送ることである」という認識であっても、その送り方が「激しく降り注ぐ」観点から概念化されているのである。このような概念化は、我々の生身の肉体経験から生じているわけであるから、必然的に異言語に渡って観察されることになる。その英語の実例の一つが以下 (9) である：

(9) *hail* down curses on him

(彼に容赦なく毒舌をあびせる)

— *GEJD* (s.v. *hail*) (イタリック筆者)

さらに、COMMUNICATION IS SENDING (伝達は送ることである) に天候事象を通した認識を「同伴」させる概念化が反映された事例が次の (10) である：

(10) He spoke with *frost* then.

(そのとき彼は冷淡に話した)

但し、(10) の背後に潜むさらなる認識を明らかにする上で注意しなければならないことは「体温」を通した抽象事象の概念化である。この問題を解く鍵となる記載が以下 (11) である：

(11) The Integrated Theory of Primary Metaphor

(初期のメタファーに関する統合理論)

Part 1 : Johnson's theory of conflation in the course of learning. For young children, subjective (nonsensorimotor) experiences and judgments, on the one hand, and sensorimotor experience, on the other, are so regularly conflated – undifferentiated in experience – that for a time children do not distinguish between the two when they occur together. For example, for an infant, the subjective experience of affection is typically correlated with the sensory experience of warmth, the warmth of being held. During the period of conflation, associations are automatically built up between the two domains. Later, during a period of differentiation, children are then able to separate out the domains, but the cross-domain associations persist. These persisting associations are the mappings of conceptual metaphor that will lead the same infant, later in life, to speak of “a warm smile,” “a big problem,” and “a close friend.”

(習得の過程における「抱合 (conflation)」という Johnson の理論。主観的 (= 非感覚運動的) 経験・判断と感覚運動的経験とが一緒に生じている時、幼児はそれら二つを区別していない時期がある。その時期には、一方では主観的 (= 非感覚運動的) 経験・判断が、

他方では感覚運動的経験とがつり合いよく抱合している（但し、両者が区別されて経験されるわけではない）。たとえば、幼児にとって、「愛情」という主観的経験は典型的に「温かさ（warmth）」、すなわち「手を握られている温かさ」という感覚的経験と互いに関係し合っている。「抱合」という期間、「連想」はそうした二つの領域のあいだで自動的に作られている。後年の「分化（differentiation）」の期間、幼児はその主観的経験（＝愛情の温かさ）と感覚運動的経験（＝手を握られている温かさ）とを引き離すことができるが、交わった領域の連想は意識の中で持続していく。このような「持続していく連想」が、後年 “a warm smile”（温かい笑み）や “a big problem”（大問題）、“a close friend”（近い友人）という表現を同じ幼児が発話するように導くことになる概念メタファーの写像（mapping）なのである。）

— Lakoff and Johnson (1999 : 46) (日本語訳筆者)

つまり、「(体温などの具象的) あたたかさ」を示す warm が「(抽象的な) 心のぬくもり」をも表し得るのは、肌が触れて物理的に感じられる「体の温度」を通し、実際には触れられない抽象的な「心の温度」が認識されているからに他ならない。この「体の温度」と「心の温度」とが密接に結びつく概念的な見地に立脚すると、次の (12) のような文において「怒り (anger)」を表すのになぜ hot が用いられるのかも明らかとなる：

(12) Don't get so *hot* about such a small thing.

(そんな小さなことでそんなに熱くなるな；カッカするな)

— 上野・森山・福森・李 (2006 : 585)

なぜなら、我々は何らかの理由で「怒った」時、体中の血液が頭の方に上ってきて顔を真っ赤にし、「体の温度」が上昇したように感じられ、その感覚運動的経験が感情事象に写像されるからである。このような「体の温度の上昇＝怒り」という「本来異なった二つの領域の交わり、つまり連想という意識行為 (the cross-domain associations)」の観点から見ると、「頭に血が上る」／「顔を真っ赤にする」という表現も同様に「怒り」を表すことになる。その英語の実例が次の (13)-(14) である：

(13) His *blood* was up.

(彼の血液は上っていた；頭に血が上っていた) (Cf. hothead 頭に血が上りやすい人)

(14) He was *flushed* with anger.

(彼は怒りで顔が赤くほとばしった；顔が真っ赤だった)

— 上野・森山・福森・李 (2006: 585)

但し、「顔を真っ赤にする」のは何も「怒り」に限ったことでないことは我々の日常の身体経験からも明らかである。たとえば、「恥ずかしい」時も血液が上って体温が上昇し、顔が真っ赤になる経験は次の (15) のような表現に反映されている：

(15) He was *blushed* with shame.

(彼は恥ずかしくて顔を赤らめた；ポツとした)

— 上野・森山・福森・李 (2006: 586)

逆に、「血の気が失せて顔が真っ青になる」のはどのような「感情」の時なのであろうか？その典型的な一例として「恐怖」を挙げることができる：

(16) He turned *white / pale* with fear.

(彼は恐怖で顔から血の気が失せた／顔が真っ青になった)

— 上野・森山・福森・李 (2006: 586)

さらに、血液の循環が滞れば、必然的に「体温が下がる」ことになる（たとえば、死体が冷たいのは血液の循環が止っているからである）。次の (17) が示すように、

(17) He was *chilled* to the bone.

(彼は骨まで冷えた；背筋がぞっとした)

— 上野・森山・福森・李 (2006: 586)

「骨まで冷える (be chilled to the bone)」イメージが「恐怖」を表すのはまさに、「恐怖」で体温が下がれば必然的に「寒く」感じられる我々の身体経験に起因しているからである。それ故、人間は体温が下がると不活発になり、最終的には凍ってしまうかのように動きがとれなくなってし

まう経験は以下の (18) に如実に現れることになる：

(18) He was *frozen / paralyzed* with fear.

(彼は恐怖で凍った／麻痺した→立ちすくんだ)

— 上野・森山・福森・李 (2006: 586)

以上の理由から、上出 (10) (以下 (19) として再掲)

(19) He spoke with *frost* then.

(そのとき彼は冷淡に話した)

においては、これまで述べてきた「体温」と「感情」との概念的結びつきが反映されていることが確認されるのである。

2.2. 「視界認識」と自然界の事象との概念的結びつき⁴

まず、次の日本語例に注目する：

(1) 蒸気船が視界の中に入ってきた。

ここでは、「三次元空間」概念表示語である「中」が共起することから、「視界」は内部空間を持った一種の「容器」として捉えられていることがうかがえる。つまり、(1) では、その空間内に蒸気船という「内容物」が存在するようになって初めて、観察者がそれを認識した事象が表されている。ここから、我々の視界認識は以下 (2) に見られる「容器のメタファー」を通して概念化されていることが見出される：

(2) We are physical beings, bounded and set off from the rest of the world by the surface of our skins, and we experience the rest of the world as outside us. Each of us is a container, with a bounding surface and an in-out orientation. We project our own in-out orientation onto other physical objects that are bounded by surfaces. Thus we also view them as containers with an inside and an outside. Rooms and houses are obvious

containers. Moving from room to room is moving from one container to another, that is, moving *out of* one room and *into* another. ... But even where there is no natural physical boundary that can be viewed as defining a container, we impose boundaries – marking off territory so that it has an inside and a bounding surface – whether a wall, a fence, or an abstract line or plane.

(我々人間は物理的存在であり、その肉体は皮膚の表面によって外界から区切られている。そして、自分の肉体以外の世界を我々の外にある世界として経験している。一人ひとりの肉体がそれぞれ、外界と境界を接する表面と、内と外という方向性を持つ、ひとつの容器なのである。我々は自分自身が持っている内と外という方向性を、表面という境界面を持っている他の物理的物体にも投影して考える。だから、それらの物体もまた内側と外側を持った容器であると我々はみなす。部屋や家は明らかに容器である。部屋から部屋への移動は、或る容器から他の容器への移動ということになる。つまり、或る部屋から外に (*out of*) 出て、他の部屋の中へ (*into*) 入るということである。...しかしながら、ひとつの容器としてはっきりみなせるような自然の物理的境界が存在しないような所にも、我々は境界を設ける。内側と境界面－それが壁であれ生け垣であれ、あるいは抽象的な線や面であれ－を持つような領域を作り出すのである。)

— Lakoff and Johnson (1980:29) (日本語訳筆者)

このような「視界＝空間」という認識上の図式は英語にもそっくりそのまま当てはまる。次の(3)がその実例である：

(3) The steamboat was *coming into sight / view*.

(蒸気船が視界の中に入ってきた)

「三次元空間内部への移動」概念表示語 *into* と「視界」の意の *sight/view* との結合体 [*into sight/view*] に *come* が結びつくことにより、「(‘the steam boat’ という) 内容物が視界という容器の中に存在するようになる状態変化」が表されるのであれば、各々と対極に位置する概念表示語を用いた場合、必然的に「内容物が存在しないようになる状態変化」が表される。以下 (4) がその実例である：

- (4) The steamboat was going out of sight /view.

(蒸気船は視界の外に消えていった)

このように、「視界／視界で捉えられるもの」はそれぞれ、「容器／内容物」を通して概念化されるわけであるが、その内容物を視界空間で捉えるためには、当然のことながら視界を遮るものがないことが必要条件となる。このような認識が天候事象を通した投影活動と相まって現れ出た表現が次の (5)-(6) である：

- (5) She was in a haze then.

(そのとき彼女はぼんやりしていた)

- (6) She was in a fog then.

(そのとき彼女は途方にくれていた)

(5)-(6) 各々における in a haze、in a fog は本来「もやの中／霧の中」という物理空間を表す表現であることは言うまでもない。したがって、ここでは我々の知覚経験から得られる「視界空間が遮られる」概念が「はっきりしない」という事象に転移していることが観察されるのである。このような理由から、下記 (7)

- (7) ごり・む・ちゅう【五里霧中】

どうすべきかの判断に迷い、方針や見込みがまったく立たないこと

— 『新明解国語辞典』(s.v. ごり・む・ちゅう【五里霧中】)

においては、「霧の中にいる」という自然環境における知覚経験を用いて「方針(=物事を行うときのめざす方向)(Cf. 『新明解国語辞典』(s.v. ほう・しん【方針】(下線筆者))がまったく立たない」という概念化がなされるのである⁵。当然のことながら、以下 (8) に示されるように、そのような「視界を遮るもの」がなければ「方針が立つ」事象が表されることになる：

- (8) 長年悩んできたが、やっと $\left\{ \begin{array}{l} \text{霧が晴れた気分だ。} \\ \text{もやもやした気持ちが晴れた。} \end{array} \right.$

3.0. 天候事象と心象との概念的結びつき

ここまで、自然界における種々の天候事象が様々な日常活動に投影されるメカニズムを観察した。このような投影活動に天候事象が用いられるのは偏に、太古の時代から現在に至るまで我々の日常生活が天候事象によって多大な影響を受けてきたからに他ならない。そして、このような影響は何も外的事象に限られるだけではなく、我々の「心象」にも大きく関与する。まさに、「天気が晴れば気持ちも晴れ」、「天気が曇れば気持ちも曇る」という日常経験が如くである。このような太陽光に基づく「明／暗」概念が顕著に現れている実例が以下 (1) である：

$$(1) \begin{Bmatrix} \text{天候} \\ \text{気持ち} \end{Bmatrix} \text{が} \begin{Bmatrix} \text{明るくなる。} \\ \text{暗くなる。} \end{Bmatrix}$$

そして、「晴／曇」概念が文字通り反映された心象状態表示の日・英の実例が次の (2)-(4) である：

$$(2) \text{晴れやかな} \begin{Bmatrix} \text{天気} \\ \text{気分} \end{Bmatrix}$$

$$(3) \begin{Bmatrix} \text{天気} \\ \text{気持ち} \end{Bmatrix} \text{が曇りがちだ。}$$

(4) a. It is fine today.

b. He is fine today.

しかしながら、我々の日常生活を振り返った時、「晴／曇」いずれの天候も一日中続くとは限らず、時には双方の気候への移行がはげしい場合もある。したがって、下記 (5) に示されるように、このような認識が心象状態の変化に反映されることになる：

$$(5) \begin{Bmatrix} \text{山の天気} \\ \text{人の心} \end{Bmatrix} \text{は変わりやすい}^6$$

(6) a. fickle weather

b. Men are fickle creatures.

さらに、天候の「穏やかなさま ↔ 激しく荒れたさま」の対立も心象状態に投影される：

$$(7) \left\{ \begin{array}{l} \text{穏やかな} \\ \text{すぐ荒れ狂う} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{天気} \\ \text{性格} \end{array} \right\}$$

そして、天候事象の悪さによる「晴れ晴れしないさま」も心象状態に投影される：

$$(8) \text{うっとうしい} \left\{ \begin{array}{l} \text{天気} \\ \text{性格} \end{array} \right\}$$

加えて、「雨—涙」および「雷（の音／衝撃）—怒り」との概念的関係が反映された実例が次の(9)-(10)である：

$$(9) \text{今にも泣き出しそうな} \left\{ \begin{array}{l} \text{顔} \\ \text{空} \end{array} \right\}$$

(10) a. He risked his father's thunder.

(彼は父親の怒りを覚悟の上でやった)

b. 昨日、親父に雷を落とされた。(Cf. 雷親父（かみなりおやじ）)

おわりに

以上、日・英における天候事象と心象との概念的結びつきの根幹を足早に観察したが、このことからでも下記(1)-(3)に顕著に表されているように、この投影活動は異言語にまたがって存在する「人間の脳の自然な活動である」ことが導き出される：

(1) きしょう【気性】

(「気象」とも書く) 生まれつきの性情。心だて。気だて。氣質。

— 『広辞苑』(s.v. きしょう【気性】)(下線筆者)

(2) Temper, *sb.*

I. † 1. The due or proportionate mixture or combination of elements or qualities; the

condition or state resulting from such combination; proper or fit combination; ...

(要素や質に関する当然の、または均衡のとれた混合や組み合わせ; そのような組み合わせの結果として生じる状況もしくは状態; 適した、またはふさわしい組み合わせ; ...)

(初出例 1387)

3. Mental balance or composure... (初出例 1603)

(精神の均衡もしくは平静)

特に「怒り」. 実例 *to keep or lose (one's) temper, to be out of temper*

II. † 4. The constitution, character, or quality of a substance or body (Orig. supposed to depend upon the 'temper' or combination of the elements); = TEMPERAMENT 3. *Obs.*

(気質、性格、または物質や肉体の質 (原義は、「気質」や要素の組み合わせによって決まるとされている); = TEMPERAMENT 3. 廃語)

(初出例 c1400)

c1400...hoot and drie in temper

(気質において怒りっぽく冷淡な)

(3) Temperament, sb.

I. 1. (Temper I. 1. に相当する意の初出例 a1412)

4. The condition of the weather or climate as resulting from the different combinations of the qualities, heat or cold, dryness or humidity; climate. *Obs.* or *arch*

(熱や冷たさ、乾燥や湿気といった異なる特性の組み合わせの結果として生じる天候や気候の状態; 気候. 廃語もしくは古語)

(初出例 1610)

— OED

< Notes >

1. sierra (西語) は「鋸」の意。ここでも、山脈の稜線の形状を認識するために我々の生活にとって身近なもの (ここでは「鋸の歯の目の並びの形状」) が利用されていることが確認される。

2. 寺澤（編）（1997：950）参照。

3. 次の (1)-(2) に示されるように、

(1) He *set* himself on the chair.

（彼は椅子に自身を据えた）

(2) He *seated* himself on the chair.

（彼は椅子に自身を座らせた；腰を据えた）

set の目的語が主語と同物指示の名詞句であれば「set ≡ seat ≡ sit」という概念上の等式が成り立つ。それ故、 $\{set-seat-sit\}$ がそれぞれ概念的に結びついていることを加味して考えれば、本論 1.2. (2) が表す事象には人間の姿勢変化が反映されていることがより顕著となる（上野（2007：7-15））。つまり、(2) では、「立／座」それぞれの姿勢変化が「東／西」の空間で行なわれていると見なされることから、rise と set とがペアで用いられ、かつ、方向・方角に from-to でなく in が用いられているわけである。このように、方向・方角が「空間」概念で捉えられるのは、以下 (3) から明らかであり、

(3) They began to sail *in* the direction of the port.

（彼らは港の方向に航行し始めた）

もし、ここで「到達点」概念表示語 to を用いると、

(4) *They began to sail to the direction of the port.

— 上野・森山・福森・李（2006：54）

direction の指示物である「方向」そのものが到達点となってしまう容認不可と判断されるのである。

4. 「視界認識」と「空間概念」とが密接に結びつく認知メカニズムについては、京都外国語大学大学院博士後期課程2年生（当時）森山智浩氏の博士論文第二次発表（2007年2月、於京都外国語大学）で詳しく説明された。

5. 以下 (1) の表現には「雲のようにちりぢりになり、霧のように消える」という概念が投影されている：

(1) 雲散霧消（うんさんむしょう）

6. 心の移ろいやすさを表す「女心と秋の空」も同様の概念化による。なお、この表現は本来「男心と秋の空」であったことも付け加えておく。

<謝辞>

本稿を作成するにあたり、日本語表現に関して京都外国語大学言語教育研究会で同大学上野義和教授、太成学院大学非常勤講師・京都外国語専門学校非常勤講師 森山 智浩氏、本学非常勤講師 福森雅史氏から有益な御意見を戴きました。この場を借りて感謝いたします。

<主要参考文献>

[Papers and books]

- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press. Chicago.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. Chicago.
- (Watanabe, S. et al. (trans.) (渡部昇一他訳) (1986)『レトリックと人生』 大修館. 東京.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh - The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought* -. Basic Books. New York.
- 上野義和 (2007)『英語教育における論理と実践－認知言語学の導入とその有用性－』英宝社. 東京.
- 上野義和・森山智浩 (2003)『イメージ&カテゴリーの英単語』KK ウィン. 大阪.
- 上野義和・森山智浩・入学直哉・李潤玉 (2002)『認知意味論の諸相－身体性と空間の認識－』松柏社. 東京.
- 上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉 (2006)『英語教師のための効果的語彙指導法－認知言語学的アプローチ－』英宝社. 東京.

[Dictionaries]

- Burchfield, R. W. (ed.) (1978) *The Oxford English Dictionary*. Clarendon Press. Oxford. (= OED)
- 井上永幸・赤野一郎 (編) (2003)『ウィズダム英和辞典』(*The Wisdom English-Japanese Dictionary*.) 三省堂. 東京. (= WEJD)
- 勝俣銓吉郎 (編) (1958)『新英和活用大辞典』(*Kenkyusha's New Dictionary of English Collocations*.) 研究社. 東京. (= KDEC)
- 金田一京助他 (編) (1989)『新明解国語辞典』 三省堂. 東京.
- 小西友七 (編) (1994)『ジーニアス英和辞典』(*Taishukan's Genius English-Japanese Dictionary*.) 小学館. 東京. (= GEJD)
- 新村出 (編) (1998)『広辞苑』 岩波. 東京.
- 認知科学学会 (編) (2002)『認知科学辞典』 共立出版. 東京.
- 寺澤芳雄 (編) (1997)『英語語源辞典』 研究社. 東京.
- 寺澤芳雄 (編) (1999)『英語語源辞典』 研究社. 東京.